海の事件簿 ② 岩並秀一

コンスタンチン君救出作戦

本庁警備救難部管理課企画係長時代の平成2（1990）年8月27日に起こった出来事は、海上保安官人生の中でも強く印象に残る事案の1つです。

その日、昼食を終えて執務室に戻ると、「ソ連（当時）のサハリンでやけどを負った少年があと70時間の命。日本での治療のため海保の航空機で北海道まで空輸できないか」という驚くべき要請が外務省から届いていました。

戦後、日本の航空機はサハリンに飛んだこともなく、日ごろ国境線近くを海保の航空機が飛べばソ連のミグ戦闘機が飛んでくる時代です。それでも、何とかしなければと思いつつ千歳航空基地の意向を確認すると、その返事は「飛べる」というものでした。そうであればと準備に取り掛かったのが後にNHKの番組「プロジェクトX」でも取り上げられたコンスタンチン君（当時3歳）の救出劇です。

走り書きのようなメモを持って長官までの了解を取る間に、外務省、北海道庁等との調整や現地ユジノサハリンスク空港の情報収集等が急ピッチで進められ、その日のうちにはフライトできる準備が整いました。よくもあれだけの短時間で準備ができたと今でも思います。

伝わった言葉「あと70時間の命」

夜明けにユジノサハリンスクに着陸できるように匂坂正久機長以下のクルーや医師等の乗ったYS—11は未明に千歳基地を飛び立ちました。恐れていたスクランブルもなく、無事サハリン上空に着いたものの、空港には濃霧が立ち込め、滑走路が視認できません。3度目の降下でなんとか着陸したのですが、本庁で聞いていた「燃料の関係でこれが最後のトライ」というYS—11の無線の声が今も耳に残っています。

その後、コンスタンチン君は札幌丘珠空港経由で札幌医大病院に運ばれ医師団の懸命な治療により一命をとりとめたのでした。

本件は、サハリン出張中に、たまたまコンスタンチン君の救助要請を受けた日本人会社員をはじめとして、当庁のほか、外務省、北海道庁、医療機関等多くの関係者の連携によって達成されたものです。

これには、「あと70時間の命」という情報のインパクトも大きかったと感じています。「あと数日の命」や「危険な状況」といった情報であったなら印象はもう少し違っていたでしょう。「伝える情報には、伝わる言葉を選ぶことが重要」ということがその時得た教訓です。

（第45代海上保安庁長官）

＝つづく

未知の空路
サハリンに"使い"して
千歳航空基地

八月二十八日未明、静まり返った千歳空港から千歳航空基地のYS11が北の空に向かって飛び立った。海上保安庁のみならず、日本にとっても新しい歴史の一ページとなる未知へのフライトの始まりである。

八月二十七日午後一時、「外務省から、ユジノサハリンスクで全身やけどであと七十時間の命の子供がいると連絡が入った。飛べるか」との一報が入った。このようなケースは初めてであり、何よりもまったく未知数と言えるユジノサハリンスク空港へのフライトである。直ちに運航、飛行計画、救急態勢の各組に分れ検討及び準備作業に取りかかった。

翌二十八日午前二時過ぎ、徹夜の準備作業が終る頃、医師団が基地に到着、早速出国手続きを済ませ、先に到着していた一管本部の四宮外事取締官、ソ連総領事・リャコブ氏とともにYS11に乗り込む。午前三時四十三分離陸、針路を北に向け最短ルートを飛行する。

午前四時三十七分、ユジノサハリンスク管制部から、境界通過の許可とユジノサハリンスク無線標識までの飛行許可が下りた。

午前五時十分、着陸のため進入を開始したが霧のため滑走路が見えない。着陸を断念して上空で天候の回復を待つ。午前六時四十二

帰路の機内に寝かされたコンスタンチン君を見守る医師団

分、無事ユ
ンスク空港
スポット
と直ちに四
リャコブ総
の係官と交
る。書類審
団が早速患
内された。
三十分ほ
抱かれたコ
ン君と父親
氏が到着、
YS11は日
ジノサハリ
を飛び立っ
帰りのコ
コースを選
大勢の報道
珠飛行場に
ヘリコプタ
務を終了し

未知なるフライトが海保に託された ＝1990年9月20日付本紙